さくらんぼがり　1

さくらんぼがり　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19852268

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, モブ霊, モ腐サイコ小説50users入り

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回はモブ霊です。♡喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

さくらんぼがり　1

ハタチになったお祝いに、師匠が飲みに連れて行ってくれることになった。
「やったじゃねぇか。酔った勢いで告白しちまえよ」
数年前から僕が師匠に片想いしているのを知っているエクボは、そう言って肩を押してくれた。

だから僕は。

「しっ、師匠！」
「ん〜？」
祝いだからと頑張って呑んでくれた師匠は、へべれけになっていた。
丁度いいかもしれない。断られるにしても、傷つかないかも……。
「好きですっ！つきあ」
「おにいさんおれがすきなの？」
ぐいっとネルシャツの襟を引かれて、キスしそうな距離でそう言われて、こくこくと必死に頷く。

「おにいさん、どーてー？」

思考が一瞬止まる。
「はい……？え、あ、まあ……」
「ふーん、おとこははじめてなんだ」
師匠の機嫌が良くなる。
「男というか、そう言うことすること自体が初めて……っ」

一瞬で。

唇を奪われた。

「かわいい……♡」
はみ、と耳を軽く噛まれて息を吹き込まれて、ゾクゾクと震える。
「し、ししょお？」
「ね、ホテル行こうよ」
すりすりと太ももを撫でられながら言われて、もう頭がパンクしそうだ。
「早くぅ……♡」
僕は立ち上がって、師匠の奢りだった筈の居酒屋のカウンターに２万円を叩き付けて、「お釣りはいらないです」と叫んで師匠の腰を抱いて店を出た。
「こっちこっち〜♡」
師匠は甘ったるい声でホテルまで案内してくれる。流石師匠、何でも知ってるなあ。
「なんてよんだらいい？」
腕を組んでしなだれかかってくる師匠から凄くいい匂いがする。
「し、シゲオとか」
「それやだ」
「えっ」
何故か否定された。
「ダ、ダーリン、とか……？」
「いいよ、だーりん♡」
甘く呼んでくれる師匠がクラクラするほど可愛い。
「ホテルついたぁ♡」
師匠は慣れた手つきでフロントから鍵を受け取る。
ふらふらする師匠を支えながら、何とか部屋にたどり着く。
言われるままに先にシャワーを浴びていたら、師匠が乱入してきて驚いた。
「おちんちんあらってやるよ♡」
「うひゃあっ！？」
師匠の指が僕の陰茎をくにゅくにゅこする。
「かわのうちがわまであらわないとだめだぞー？♡」
「う……っ」
白い指に先端を触られて、暴発しそうになる。

「……でそう？いっかいびゅっびゅっするか？」
「あっ……やめて下さい……」
にゅくにゅくとこすられてビクッと腰がひきつる。
「それとも……おれのなかでだしたい？」
手を師匠の下腹部に誘導されて、初めて師匠の柔らかい下腹に触れて、かっと頭が沸騰する。
僕は必死で頷いた。
すると師匠はやたらエロく笑って、僕をシャワー室から追い出した。
「いいこでまってて」
そう言ってしばらく経ってから、師匠は濡れ髪で出てくる。
幼く見えて、ドキっとした。
「ぜんぜんなえてないじゃん」
嬉しそうにそう言ってから、師匠はポケットからコンドームの箱を出して千切る。
「おれがつけてあげるよ」
くるくると楽しそうに立ってる僕にゴムを着けてきた。
師匠に押されるまま、ベッドに横になる。
師匠は騎乗位の体制をとって、縦に割れたふっくらしたアナルを僕に見せつけてきた。
き、綺麗だ……。
「じゃあ、どーてー、いただきます♡」
ぷちゅ、と僕のピンク色のコンドームが被せられた先端が、師匠のアナルに触れる。
「ぁ……っ♡」
中からとろりとした液体が出てきて、ぐぽんと僕のモノは呑み込まれた。
「かたくて……っ♡さいこう……っ♡」
すごい。
師匠の中、吸い付いてきて搾り取るみたいだ。
「し、ししょう、ししょうっ、もう、出ますっ」
「そのよびかたやだぁっ♡あらたかってよんでっ♡」
し、師匠って付き合ったらこんなに甘えん坊なのか……まいった

な……。
「な、にっ？そのかお……っ♡かわいくないっ♡もお、いっちゃえっ♡♡♡」
ぐに、と内部に押し付けられて、僕はあっけなく吐精した。
「じょおずにできました♡」
ぬぽん、と内部から僕を引き抜いて、コンドームを外しながら師匠が言ってくれて嬉しくなる。
「いっぱいでたな♡」
縛ったコンドームをプラプラされて恥ずかしくなる。
「おれいに初フェラしてやるなっ♡おそうじふぇらだぞ〜」
ネットリと舐め上げられ、パクリと熱い口の中に咥えられ、股間で師匠の頭が揺らめく光景にまた堪らなくなって出してしまった。
気持ちいい……。
「師匠、」
「あらたか」
「あらたか……さん。僕も、新隆さんを気持ち良くしてあげたい」
「うれしい♡じゃあ、ちくびなめて？」
上下を交代して、言われるがままに桜色の乳首にかぶりつく。
「あっ……じょうずぅっ♡きもちいいよ、だーりん♡もうずぼずぼしてほしくなっちゃった♡」
慌ててゴムを着けようとする僕の手からゴムを奪って新隆さんがするすると嵌める。
「じぶんでいれる？」
「は、はいっ」
僕はドキドキしながら新隆さんのアナルに先端を当てる。
「おもいきって、ぐっ、と……アッ♡」
ぐぷ、と先端が挿入れば、あとはズブズブと飲み込まれていった。
「あっ、そこぉっ♡」
腹側の一点を掠めたら、新隆さんが甘い声を上げた。
「そこっ♡きもちいいっ♡ごりごりしてぇっ♡」
「……っ、分かりましたっ」
身体をほんのりピンクに染めておねだりする新隆さんの破壊力がヤバい。

僕の恋人、めちゃエロ可愛い。
「あっ♡あっ♡あっ♡あ……っ♡イ、くぅ……っ♡〜〜〜〜ッ♡♡♡♡」
ビクン、と新隆さんの背中が反って、びゅるると勢いよく射精した。
内部がうねって、それにつられて僕も絶頂する。
「きもち……かったぁ……♡だーりん、じょうずぅ……♡」
新隆さんをイかせられた感動で震えてきた。
「ぅあっ♡すごっ、げんきぃ……♡」
「当然じゃないですか！いつから片想いしてると……んっ」
激しくディープキスされて、頭がぼうっとしてくる。
「すきなだけ、ズボズボしていいぞ……♡」
そう言われて、僕は本気で朝日が昇るまで新隆さんを抱き潰した。

※

や、やりすぎたかな……。
僕は正午を回っても起きてこない新隆さんを眺めながら反省する。
「あててて……」
「！だ、大丈夫ですか」
「んぇ？なんでモブが……」
「…………まさか新隆さん、昨日のこと…………」
「新隆さん！？なんだよその呼び方！！」
僕はかいつまんで説明する。
「……すまん……」
師匠は頭を押さえて僕に謝ってきた。
「俺な、『童貞喰い』の悪癖があって……酔っててお前だと思わずやっちまった。本当に悪かった」
「どうていぐい」
頭が真っ白になる。
「じゃ、じゃあ師匠、僕の告白は……」
「すまん、断らせてくれ。俺、童貞にしか興味無いから」

その日、とあるラブホが地面から射出されてえらい騒ぎになったそうな。

続